

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成21年度派遣報告書

——カメルーン・ヤウンデ第1大学、バカ語、派遣期間(H21. 7. 19-H21. 11. 13)——

平成21年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程1回生

園田 浩司

#### 自身の研究テーマについて

わたしたちはなぜ、平穩に「待つこと」ができないのだろうか。たとえば電車が5分遅れたというだけで、急にぼんやりした不安にさいなまれたり、きゅう屈さを感じたりすることがある。待ち合わせをしているが、時間になっても相手が現れないと、どこか落ち着かなくなって、特に用もなく携帯電話をのぞき、メールを打つふりをして、その場をしのごうとした経験はないだろうか。このように、たとえば何かを待っていると、特にすることもない時間にふいにおそいかかる、何とも言えない「息苦しき」がどこからやってくるものなのかを、探りたいと考えている。ただし、「待つこと」それ自体について研究するのは非常に困難である。なぜなら、「待っている」という行為は、必ずしも他者が判別できることではないからである。



モングル（ドーム型住居）とバカの子ども

そこで、その手がかりとして、狩猟採集民の「遊び」に焦点をあてている。「遊び」は、「冗長（くだくしく長いこと）な時間をできるだけ維持し続けようとする行為」だという議

論がある。そうだとすれば、「待つこと」と「遊ぶこと」は、「冗長な時間を過ごす」という点において、深い関わりがあるように思われる。すると、「遊び」といういくらかそれだと判断できる行為を研究することで、「冗長な時間」に対する狩猟採集民の態度のようなものを、浮かび上がらせることができるのではないかと考えるのである。

## 研修言語の概要

ピグミー系集団（ムブティ、アカ、バカ）に特徴的なのは、文化は強く類似しているが言語はそれぞれの特徴をもっているという点である。カメルーン東南部を中心に暮らす狩猟採集民バカ・ピグミーの言語、バカ語もまたそうであり、これは、言語は隣接する他の民族集団からの借用であるからだとされている。なかでもバカ語は、バントゥー系よりもむしろウバンギアン系言語に近いようだ。

## 語学研修の内容について

Introduction to african linguistics というテキストを用いて行われた。10月6日から11月6日までの約1ヶ月、週5回午後14時から16時まで講義を受けることができた。内容は、バントゥー諸言語がもつ言語的特徴の概論である。動詞や名詞の前につく特異な接頭辞、時制表現、否定形など、代表的ないくつかの言語から具体例があげられ、講義が展開された。さらに、日本人には発するのが困難な発音記号については、何度も繰り返し練習できるように、講師に依頼して録音させてもらった。今回、残念ながら私が調査に用いるバカ語が取り上げられることはなかったの点、その点、バカ語話者が生活する地域に足を運んで、別に習得する必要があった。そこでは、私がこれからフィールドワークをはじめるとして不可欠な日常表現を重点的に聞き取り、単語集を作成した。



講義を受けた教室



お世話になった講師

## 研修期間中に印象に残った体験や経験

講義では、あらゆる言語の基礎となる発音記号の発音の仕方から丹念に教えてもらった

ので、思いがけず英語の勉強にも、そしてフランス語の勉強にもなった。先にも述べたように、バカ語については講義とは別に勉強することになったのだが、私の場合、講義よりもさきにそういった機会を得た。その体験をふまえてのぞんだ講義だったので、学んだことも多かった。たとえばアフリカ諸言語の多くは、何よりもイントネーションが重要視されることが強調された。実際に講師による発音を聞くと、自分がそれについてほぼ無自覚であったことを思い知った。私のバカ語は、実は理解されていなかったのかもしれないと、反省することになった。発音が難しい現地語を、説明をまじえてなまで聞けるのは、おそらく現地の大学でしかできない貴重な体験である。

### **目標の達成度や反省点について**

ワンツーマンの講義だったので、毎回思う存分質問することが出来た。したがって、授業の内容を理解するという当初の目標は、とりあえず達成できたと考えている。全体的に見ればこのように非常に充実した期間だった。

しかし、もちろん反省点もある。せっかく大学に通っているにもかかわらず、交流をもったのは授業を担当してくれたこれら 2 人の講師だけに限られたことだ。彼らによると、大学に来ている者で、バカ語を話す者はいないということだったが、バカ・ピグミーや自身の研究について何かしら関わりをもつ研究者に出会うことはできたかもしれない。さらにそれを通じて、バカ語にかぎらず公用語のフランス語もさらに上達できたはずである。ふたたび大学に行く機会ができれば、今度はもっと多くの人と関係を作りたい。